

OB・OGインタビュー企画 「いきものがかり」水野良樹さん



インタビューに応じてくださった水野良樹さん

今年度の一橋大学入学式にて、音楽ユニット「いきものがかり」のリーダーで、卒業生である水野良樹さん(平14社)が、新入生に向けた祝辞を述べた。本紙は、音楽業界へ進み、そこで大きな成功を収める本学OBの水野さんに、学生時代の思い出や入学式の式辞への想い、一橋生に向けたメッセージを語ってもらった。

水野さんの簡単な生い立ちとご経歴を教えてください。
地元の神奈川県海老名市で高校まで過ごした後、都内私立大に通いながら「仮面ライダー」をし、一橋大学の社会学部に入社し、2006年に卒業しました。大学時代は、高校の同級生と組んだ「いきものがかり」の路上ライブをやっていました。その後は、大学卒業と同時に、メジャー

デビューをしました。そこから、CDを作ったり、ライブ活動を通して生活をしてきました。デビューから18年経った今は、「いきものがかり」の活動と並行して、他のアーティストの方に楽曲提供をさせていただいたり、個人的に色んな分野の方とお話を伺ったり、「一緒にものをつくる」HIROBA」という活動もしています。
#2面に続く



一橋新聞部

〒186-8601
東京都国立市中2-1
一橋大学西キャンパス
学生会館別館1F

部長 田村英慈
編集長 友定隆
印刷 ウェブプレス

http://hit-press.org/

新人記者募集中

KODAIRA祭を挙

実行委員長に取材



委員長を務めた大浦暖人さん

6月8日と9日の両日にわたり、第27回KODAIRA祭が開催された。新型コロナウイルス感染症の影響が薄れた昨年と同様、今年も全面的な対面形態での開催となった。本紙は、今年KODAIRA祭実行委員長を務めた大浦暖人さん(経2)に取材し、同祭の振り返りや、来年度の開催にあたっての思いなどを語ってもらった。

1、2年生から構成されるKODAIRA祭実行委員会は、およそ200名の委員を抱える大きな組織。組織のリーダー経験が今までの大浦暖人さんは、「大学では新たなことにチャレンジしてみたい」との考えから、巨大組織である同委員会のトップに挑戦したのだという。
昨年から本格化した準備では、まず初めに、「Frontier」を今年のKODAIRA祭のテーマに決定した。コロナ禍からの復活を果たした昨年のテーマが「renaissance」であったことを踏まえ、コロナ禍明けの新时代的KODAIRA祭をつくりあげたいとの思いが込められている。このテーマに沿って、最先端の象徴ともいえる「宇宙」をモチーフに、今年と同祭での企画や装飾・看板づくりが進められた。
同祭当日までの準備期間中、学内の学生団体や学生支

援課、学外では地域の商店の方など、多方面からの連絡や話し合いに追われていたという大浦さん。一つ一つのメールを把握した上で返信したり、対面で協議する場面が多くあったりしたことは、多忙で大変だったと振り返る。その一方で、実行委員を務めていなければ、関わる機会がなかったであろう人との出会いもあり、こうした経験は非常に楽しいものだったと語る。
秋ごろに自分たちが考案した企画が、4月以降に次々と仕上がりつつある過程も、委員を務めていて楽しいと感じた場面だそう。

KODAIRA祭当日、悪天候の中での開催となった昨年は、好調な配布状況に「彼らの労力が結果として出てい

となった。天気の後押しもあり、多くの来場者に恵まれた結果、1年生のクラスごとに置かれた模擬店も大盛況だったそう。KODAIRA祭での模擬店の開催が、クラス仲をさらに深めることに繋がれば嬉しい」と大浦さんは言う。
これに加えて、受験生向け冊子である『黄本』の配布状況が好調であったことも、祭当日で嬉しかったことだと語る。受験生応援パート内で、1年生委員が中心となつてくる黄本には、本学の受験に関するデータなどがふんだんに盛り込まれている。試行錯誤しながら冊子の作成にあたり、好調な配布状況に「彼らの労力が結果として出てい



コスト・パフォーマンス(コスパ)という語が叫ばれるようになって久しい。ご存じとは思いますが、和訳すれば「費用対効果」のことである。ところが最近、私の周りではコスパにも増してタイパを重視する人が増えている気がする。タイム・パフォーマンス、「時間対効果」のことである。ある友人は、食事はなるべく短時間で済ませたいのだという。また別の友人は、授業動画を倍速で見ているそうだ。後者が本当に頭に入っているのかはさておき、同じ効果ならより短い時間で得られた方がよいというのは、一理あるといえる。しかし効果だけがすべてなのだろうか▼「Time is Money」の公式に当てはめれば、確かにタイパもコスパと等しく重要であるのだから。ただし両者には決定的な違いがある。Moneyは5年後も同じMoneyだが、Timeは一秒後はすでに別のTimeなのである。要するに、その一瞬間でしかできない経験があるのだ。例えば帰り道、いつもとはちょっと違う道で帰ってみる。あるいは途中の駅で下車してみる。そこに広がる景色は、その時そこでしか得られない、かけがえのない経験ではないだろうか。何か目に見えた効果を得られるわけではない。しかし、こうした経験を「価値」と呼ぶことはできるだろう▼綺麗事ばかり並べていると思われるかもしれない。何かと締め切りがある実社会を生きる上では、タイパを意識せざるを得ないことの方が多いだろう。かくいう私も、今まさにタイパの波にのまれて、この原稿を書いているのである。締め切りは明日。「タイパ」というより「怠惰」なのではないかという批判は、ご遠慮願いたい▼とにかくここで私が言いたかったのは、効果ばかりが「価値」ではないこと、さらにいえば無駄な時間はないということだ。タイパが捉え損ねた何かに、ちよつと意識的に目を向けてみてほしいのかもしれない。

【内田輝大】

紙上の編集室

本号をもちまして、第100代編集部は終了となります。次号からは第101代となり、今後の同祭への思いを話します。さらにパワーアップして帰ってくるであろう今後のKODAIRA祭に、大きな期待を寄せたい。

【田村英慈】



本年度の入学式のゲストスピーカーとして登壇した

「清志まれ」という筆名で小説も何冊か出すなど、執筆活動にも取り組んでいます。

——なぜ一橋大学社会学部を志望したのでしょうか。

高校時代に、どういう学校のどういう学部に行こうかな、と悩んでいた時に、社会学という学問はなんでもできるんじゃないかな、社会のことを俯瞰する学問なのかな、というぼんやりしたイメージで志望校を選択しました。国立の大学では、社会学部という名前が付いた学部がある学校は当時そんなに多くなくて、お恥ずかしいですが、国立大学の偏差値ランキングの一番上の方に一橋大学があります。

——大学生活やサークル・ゼミの思い出を教えてください。

2年生くらいから「いきものがかり」のインディーズ活動に本格的に打ち込み始めました。

友人たちに言ったら「お前の学力じゃ絶対できないだろ」と笑われたくらいです(笑)。

ただ、ちよつとずつ調べていくと、ゼミが少人数で行われていることや文系の学部が集まっていることから、少数で密な授業ができるというイメージが生まれました。

あと、大学のパンフレットを覗くと、国立の素晴らしい風景や、兼松講堂など、すごく雰囲気があったので、そこに憧れて「一橋大学に頑張つて行こう」と思うようになりました。

——大学生生活やサークル・ゼミの思い出を教えてください。

2年生くらいから「いきものがかり」のインディーズ活動に本格的に打ち込み始めました。

2年生くらいから「いきものがかり」のインディーズ活動に本格的に打ち込み始めました。

した。ライブハウスを巡ったり、レコード会社や芸能事務所の人たちと関わるようになったり、将来を見据えた活動が始まっていたので、その生活と学内の生活を同時に車輪として回していく生活でした。僕は実家の海老名から国立まで2時間くらいかけて通学していたので、それが大変だったという印象が強くあります。

クラスに関しては、社会学部の学生だけでなく、商学部、経済学部、法学部などで全然違うことを学んでいる友達たちがいたので、自分が取り組んでいた音楽以外にもビジネスや法学など、物事への様々な視点があることを知ることができました。それが一橋の学生生活の中で、すごく大きかったです。

ゼミは、労働経済学の依光先生(※1)でした。僕は依光先生が定年退職される年の最後の生徒だったので、すごく優しくて(笑)。卒論も「どういふ分野でも構わないから、自分の好きなことをやりなさい」と言われました。

その頃には、音楽の仕事をするといいことある程度固まっていたので、音楽配信が増えていくことによって音楽産業がどうなるのかをテーマに卒論を書きました。その後デビューして、実際に音楽産業に入っていく中で、予備知識をつける上では、これはすごく大事な時間だったと思うので、自由にやらせていただいていたよかったです。

——大学時代の経験は水野さんの音楽性にどのような影響を与えたのでしょうか。

アーティストと言われるのに押し出されてしまいがちな複眼で物事を見るという視点を学んだので、不特定多数の人に楽曲を届けるという職業の宿命からすると、これは非常にプラスに働いたと思います。また、社会科学概論という授業で町村敬志先生(※2)がおっしゃっていた「社会科学を学ぶ大前提として、当事者性の視点を忘れてはいけない」という趣旨の発言がすごく印象に残っています。歌詞をつくっている時、僕自身の倫理観や価値観をどんなに削ぎ落しながら曲を書いたつもりでも自分固有の見方についてしまっている、歌詞がちゃんと踏まえないと、歌詞が持つメッセージが非常に偏ったものになってしまう。こうしたところで、先生の発言には、影響を受けました。

授業を担当された先生が様々な参考文献を提示しながら、なぜ他者を殺めてはいけないかという問いを考えていく倫理学の授業も印象的でした。受験までの勉強はある程度答えがあつて、それに対して正解か不正解かという勉強の仕方だったので、大学に入ると、答えが固定化されていない問いについてずっと考え続ける勉強の仕方を学びました。答えが固定化されていないのは、社会も音楽も同じです。これは社会人として生活していく上でも、音楽に向き合う上でもすごく大事な認識だったなと思いますね。

——大学時代の経験は水野さんの音楽性にどのような影響を与えたのでしょうか。

大学時代の経験は水野さんの音楽性にどのような影響を与えたのでしょうか。

「当事者性の視点を忘れてはならない」 今も生きている大学時代の教え

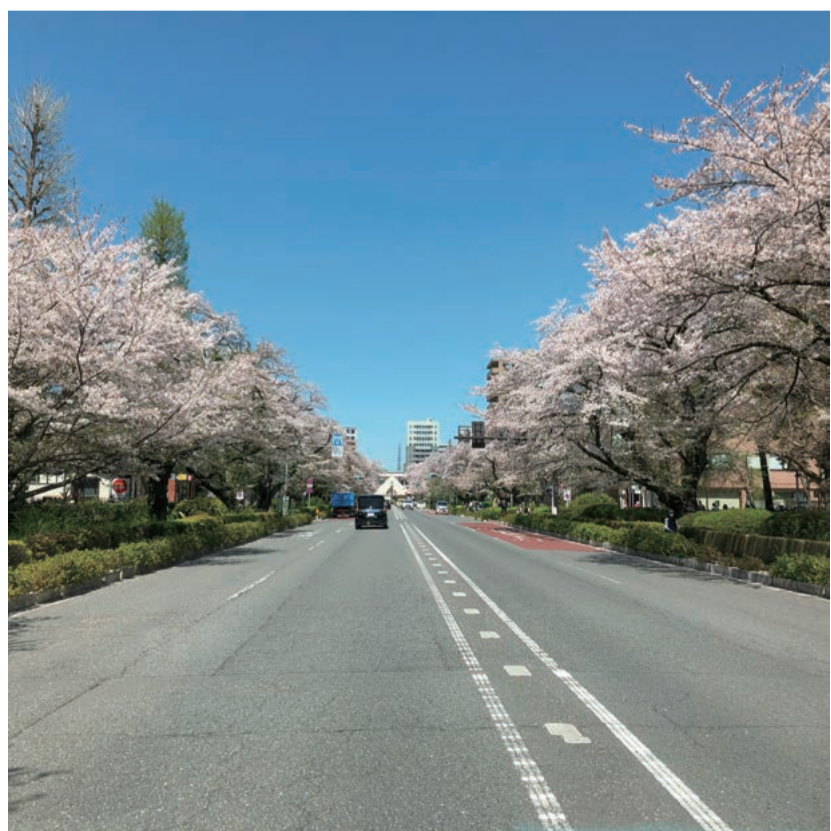
——今年度の本学入学式で、式辞を読んでいたいただきました。どのような思いで述べられたのでしょうか。

話長いつて思われてないかなとドキドキしながら(笑)。

当たり前なんですけど、学生の皆さんが主人公になれるような、ご自身に重ね合わせられることを言えたらいいなと思いついていました。個人的には、まさか自分が入学式に兼松講堂で言葉を述べさせていただく機会をいただけるなんて思っていなかったもので、非常に感慨深い気持ちで壇上に立たせていただきました。

——学内や国立の街で思い出の場所がありますか。

やっぱり大学通りの桜並木ですね。僕は後期試験で入学したんですけども、合格発表が大学の掲示板に貼られているのを見に行った世代なんです。その年が、たまたま桜が咲くのが例年より早く、発表当日が満開だったんです。もちろん国立の桜並木を見るのはその日が初めてでした。試験の手ごたえがなく、「どうせ受かっていないだろうな」という悲壮めいた気持ちで大学へ向かいました。そこで人生で初めて国立の満開の桜並木を目にして、受験の合否結果に関係なく、凄く報われた気がしました。結果的に受かっていたのですが、自分の受験番号を見つけた時は現実には思えなくて(笑)。どこのベンチに腰掛けて、桜の並木を眺めながら母親に電話したら、母親が泣いていて、すごく人生のタイミングとし



水野さんが思い出に残ると話す桜並木

ては印象に残っています。こじつけるわけではありませんが、僕らのデビュー曲が「S A K U R A」という曲で、これは神奈川の地元の桜をイメージしたものであるのですが、自分の中では国立の桜も意識しています。

——最後に、一橋生へメッセージをお願いします。

自分も多分、学生の頃に20歳くらい離れた人に「今の時間は貴重だよ」と言われたら「そんなこと言われても」と思っていたと思うので何も言えないですが、やっぱり大学で過ごす時間って貴重だと思いますね。でも、みんなが同じ楽しさや苦しさを共有していかないわけだし、人それぞれ人生って全然違う。「学生だからこうでなきゃいけない」とか「若いからこうあんなきやいけない」ということに囚

われないで、自分にとって大切なものを自分で判断しながら前に進んでいくのがいいんじゃないかな。その時々で一歩生懸命やっていると、意外と失敗しても納得できたりするのかなと思うので、貴重な大学生活、頑張つて楽しんでいただけたらと思います。

(※1) 依光正哲(よしみつ) さまとし、1942年 本学出身の経済学者。社会政策や人口・外国人問題が専門。本学名誉教授を務めた。

(※2) 町村敬志(まちむら) たかし、1956年 社会学部。専門は都市社会学。本学名誉教授を務めた。

水野良樹(みずの・よしき) ソングライター。1982年生まれ。神奈川県出身。2006年一橋大学社会学部卒。同年にいきものがかり「S A K U R A」でメジャーデビュー。作詞作曲を担当した代表曲に「ありがと」「Y E L L」「風が吹いている」など。グループの活動と並行して、ソングライターとして様々なアーティストに楽曲提供を行うほか、雑誌・新聞・ウェブメディアでの連載執筆など、幅広く活動している。2019年には自身のプラットフォーム「H I R O B A」を立ち上げ、多彩なアーティストとコラボしている。2022年には清志まれの筆名で小説家デビューを果たした。

【ドゥルゴーン】

女子新入生などに家賃補助

来年度から、「女子枠」は設置せず

本学は創立150周年記念プロジェクトの一環として、来年度以降の学部新入生のうち、女子学生または東京圏外出身学生50名を対象に、家賃を一部補助する「住まい支援制度」を実施すると発表した。

制度導入の背景には、学部生に占める女子学生や東京圏外出身学生の割合が低いことがある。とりわけ女子学生については、経済学部や新設のソーシヤル・データサイエンス学部では1割超に留まり、全学部でみても3割に満たない(23年5月現在)。文部科学省の「令和5年度学校基本統計」によれば、国内の大学全体で、学部学生に占める女子学生の割合は45・7%であることから、他大学と比べても低い状況にあることがわかる。こうした現状を踏まえ、本制度を導入することで、女性をはじめとする多様な受験生に本学を目指してもらい、学内のダイバーシティ推進につなげるのが狙いだ。

具体的な支援内容としては、来年度以降に本学学部に入学者の新入生のうち、(1)女子学生、(2)東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県以外の道府県出身の学生、の2つの条件のいずれかに該当する50名を対象に家賃補助を行う。ただし物件は本学が指定する民間物件に限り、補助金額は月額3万円、年額36万円を限度とする。支援期間は入学から最長2年間と定める。申請期間や申請手続き、物件情報などについては、詳細が決まり次第、本学ウェブサイトで発表するといふ。

◇

このように本学でも、学内のダイバーシティ推進を目的に、女子学生の割合を高めようとする制度が始まった。マインリテイである女子学生を増やすための取り組みとしては、こうした家賃補助制度以外にも、入学試験において女性のみが出願できる「女子枠」の設置が挙げられる。これに関連して本紙は、「女子枠」を導入する予定はあるかを本学担当者に尋ねたところ、導入の予定はないとの回答を得た。担当者はその理由として「入試の公平性を考慮し、入試以外の方法で女子学生を増やす取り組みを行っているため」と説明する。

「女子枠」は、女子学生の比率が少ない傾向にある工学系、理学系の学部を中心に、近年導入する大学が増えている。その一方「学力を測る入

試において、性別という学力以外の要素で区別するのは不公平だ」といった批判も根強い。多様性に配慮しつつも、多くの人の理解を得られるような制度設計を進めていくことが、本学を含めすべての大学に求められているといえる。

「女子枠」を導入している	
東京工業大 (全学院)	金沢大 (理工学域)
名古屋大 (工学部)	熊本大 (情報総合学環)
琉球大 (工学部)	東京理科大 (工学部など)
今後「女子枠」を導入予定	
神戸大 (システム情報学部※)	25年度入試から
京都大 (理学部・工学部)	26年度入試から
大阪大 (基礎工学部)	

※神戸大システム情報学部は、新設学部であり仮称

「女子枠」を導入している / 導入予定の主な大学

【内田輝大】

東京メトロ竹橋駅近く、本学同窓会組織「如水会」のある千代田区一ツ橋の如水会館の隣に一橋大学のキャンパスがあることを存じだろるか。今回、一橋新聞部は「一橋大学千代田キャンパス」を訪問した。

現在千代田キャンパスには経営管理研究科、法学研究科等の一部専攻やプログラムの授業が行われており、約400人が学んでいる。経営管理研究科には2つの専攻がある。国際企業戦略専攻は千代田キャンパスに本拠をおき、約80パーセントが留学生でMBA・DBA(※)の取得を目指し昼間に英語での講義が開かれている。一方経営管理専攻では、千代田キャンパスで日本語による2つのプログラムの講義が開かれ、東京駅に近い好立地であるため、多くの社会人が通う。また法学研究科にはビジネスロ―専攻がある。国際企業戦略専攻を除き、講義は夜間大学院として、主に平日の18時20分から22時までの2コマが開かれている。ほとんどの学生たちがそれぞれのスケジュールに合わせて、週に3回から5回通うような履修を組むそうだ。

千代田キャンパスの教育には、国立での教育といくつかの違いがある。1つ目はその学生の多様性である。入学には社会人経験が条件となっており、東京近郊、なかには茨城県や静岡県から30代、40代を中心に60代までの学生が通う。社会人で一般企業に勤める人がほとんどであるため、入学した4月に海外赴任が決

もう一つの一橋

千代田キャンパスに潜入

まり休学を申請する例もあるそうだ。また多くの留学生が学び、キャンパス内には祈祷室も設置されているほか、日本での就職支援という目的で夜間には日本語教室が開かれている。2つ目は講義の目的だ。学生の割合に社会人が大部分を占める理由として実務に生かせる講義という魅力がある。千代田キャンパスの専攻等のうち、国際企業戦略専攻のMBAプログラムは専門職大学院という形をとり、実務経験のある教授の数が確保されるようになっていく。企業



千代田キャンパスでの授業。実務経験のある教授が多数在籍している



旧校舎の外観 (提供: 学園史資料室)

なぜ千代田に一橋のキャンパスがあるのか。その理由は1885年までさかのぼる。神田川の分流である日本橋川に架かる「一ツ橋」の北詰に東京商業学校が設置された。1920年には大学令によって東京商科大学に昇格するものの、1923年に関東大震災が起これば校舎は全壊し、更地にするための爆破に よって残存した校舎もなくなつた。1933年まで仮校舎を置いていたが、当時、箱根土地株式会社(現在の西武プリンスホテルズの前身)が主導していた学園都市構想に従った。1980年代以降はほとんどの活用されず、1992年までツタと銀杏に一面覆われていた。すでに1990年代初めには夜間大学院としての千代田キャンパスの構想があり、1998年に学部を置かない独立研究科として国際企業戦略研究科を設置、2003年に国内初の経営系専門職大学院として実現した。

国立の学部生にはなじみの薄い千代田キャンパスであるが、そこでは多くの一橋生が学んでいる。社会に出た後でも学ぶ機会はあることを忘れないでほしい。

(※) 経営管理学の修士、博士 (Master/Doctor of Business Administration)

【中谷若葉】

「ラーメン孝太郎」 国立にオープン

社長に取材 & 記者が実食



新たにオープンした「横浜家系ラーメン孝太郎」

学生にとって、身近な存在、ラーメン。最近、大学近くに新たにラーメン屋ができたのをご存じだろうか。本紙は、昨年12月に国立にオープンした「横浜家系ラーメン孝太郎 国立店」の魅力伝えるべく、同店を経営する、株式会社エンの杉本孝太郎社長にお話を伺った。また、後日、記者が実際に国立店に足を運び、同店の魅力を体験してきた。

横浜家系ラーメン孝太郎は、神奈川県を中心に展開する、濃厚な豚骨ラーメンが特徴のラーメン店。国立店が現在ある場所には、以前まで「横浜家系ラーメン大和家」という別のラーメン屋が店舗を構えていた。しかし、コロナ禍で同店の売り上げが伸び悩んだところを、残念に思ったラーメン孝太郎の杉本さんが、設

備はほとんど変えずに買い取ったのだ。ラーメン孝太郎のオープンにあたって杉本さんは何度も国立を訪れ、競合店や土地柄、人々の様子などを調査したそうだ。ラーメン孝太郎国立店の強みは、営業時間の長さ、店の雰囲気、そしてやはりその味である。まず、営業時間は朝11時から深夜2時（金土・祝前は深夜3時）までと長時間営業しており、頻りに腹を空かせる我々大学生にとって、いつでも駆け込むことのできるラーメン屋の存在はありがたい。

店の雰囲気はどうだろうか。社長の杉本さんは、明るく活発で、学生に対する理解も深く、地域に根差したお店を重視しているそう。このような社長の方針の下、ラーメン孝太郎はとても居心地の良い空間が作られている。

スタッフは愛想がよく、優柔不断な記者の注文にも笑顔で応対してくれた。赤と黒を基調とする広い店内は、カウンター席のほかにテーブル席がいくつもあり、団体で来ても入りやすい。スタッフと視線が合いがちなカウンター席も、段差があるおかげで気にせず食事に集中できる。また、ライスのお替わりもセルフサービス方式で、多忙なスタッフを煩わせることを気にかけない。

気になるラーメンの味はどうだろうか。ここからは、社長直伝のおすすめメニューを、実際に店舗で食した記者の感想も交えながら紹介していきたい。

は、なんといってもネギチヤシュー麺（1300円）。記者も店舗ではこちらをいただいた。シャキシャキのネギは、人によっては辛く感じるかもしれないが、とろみの強い豚骨スープにひたして食べると、その食感の良さが際立ち、なんとも香ばしい味になった。5枚のチャーシュー、ほうれん草、ウズラの卵も入っており、どれもネギと麺との相性抜群だ。麺は大目で、豪快にすすむことでさらに食欲が掻き立てられる。食卓には数々の調味料が用意されており、（トウバンジャン、生姜、玉ネギ、ラー油、醤油、酢など）味を変えることで最後までラーメンを楽しむことができる。記者も食事の中段にトウバンジャンを加えてみたが、ネギとは違った辛味が追加されたことで味にさらなる立体感が生まれ、感動したのを覚えている。

濃厚豚骨ラーメンをメインで扱う孝太郎だが、それ以外にも担々麺や辛味噌系ラーメン、魚介豚骨スープなどメニューも豊富に取り揃えており、誰でも好みの味を見つけられるだろう。例えば、大胆なビジュアルとボリュームを誇るかの有名な二郎系ラーメンに独自のアレンジを加えた「孝二郎」の提供も、5月下旬より始まった。現在、国立に二郎系のラーメン店はないので、こちらを利用してみたいはいかがだろうか。また、7月からは来店ポイント制の導入を始めた。1回の来店ごとに1ポイントが付与され、10ポイント貯まれば、通常ラーメン1杯が無料でいただけるとのことだ。

今後の取り組みとして、現在の終日ライス無料に加え、学割ラーメンの導入も検討しているそうだ。

おいしくお手頃なラーメン店が、大学や駅にほど近いところにオープンした。大学の授業終わり、部活の練習後、1人でも、友人とでもぜひ一度訪れてみてはどうだろうか。

【藤本葉野】

は、なんといってもネギチヤシュー麺（1300円）。記者も店舗ではこちらをいただいた。シャキシャキのネギは、人によっては辛く感じるかもしれないが、とろみの強い豚骨スープにひたして食べると、その食感の良さが際立ち、なんとも香ばしい味になった。5枚のチャーシュー、ほうれん草、ウズラの卵も入っており、どれもネギと麺との相性抜群だ。麺は大目で、豪快にすすむことでさらに食欲が掻き立てられる。食卓には数々の調味料が用意されており、（トウバンジャン、生姜、玉ネギ、ラー油、醤油、酢など）味を変えることで最後までラーメンを楽しむことができる。記者も食事の中段にトウバンジャンを加えてみたが、ネギとは違った辛味が追加されたことで味にさらなる立体感が生まれ、感動したのを覚えている。

濃厚豚骨ラーメンをメインで扱う孝太郎だが、それ以外にも担々麺や辛味噌系ラーメン、魚介豚骨スープなどメニューも豊富に取り揃えており、誰でも好みの味を見つけられるだろう。例えば、大胆なビジュアルとボリュームを誇るかの有名な二郎系ラーメンに独自のアレンジを加えた「孝二郎」の提供も、5月下旬より始まった。現在、国立に二郎系のラーメン店はないので、こちらを利用してみたいはいかがだろうか。また、7月からは来店ポイント制の導入を始めた。1回の来店ごとに1ポイントが付与され、10ポイント貯まれば、通常ラーメン1杯が無料でいただけるとのことだ。

今後の取り組みとして、現在の終日ライス無料に加え、学割ラーメンの導入も検討しているそうだ。

おいしくお手頃なラーメン店が、大学や駅にほど近いところにオープンした。大学の授業終わり、部活の練習後、1人でも、友人とでもぜひ一度訪れてみてはどうだろうか。

【藤本葉野】



記者が注文した「ネギチャーシュー麺」

大学生協の運転免許
2024.4~2025.3

生協割引料金でお得!
コンビニや自動車学校へ直接申し込むよりも、お得になっています。

教習所の申し込みは、**生協西ショップ**で承ります

WEBサイトはこちら

●すべて「優先予約コース」なので、一般入校よりも、**技能教習の予約を多く所持**、または、**仮免まで一括で予約**できます

※教習所ごとに異なります。詳しくは店頭のパフレットまたはWEBサイトをご覧ください

●一般で申し込むより安く申し込めます

●お得&安心なキャンペーンや短期コースなども時期によりご用意しています

教習所は**お得な**在学中に通いましょう!





一橋と次の百年へ

一橋新聞部

2024年6月15日、
一橋新聞は創立100年を迎えました。
関東大震災の被害情報を
各地の本校関係者に伝えるために
発行された一橋新聞。
戦火などの困難を乗り越え、
100年もの間
一橋の歴史を刻み続けてきました。
一橋新聞は
これからも本学と共に
歴史を刻み続けます。

～一橋と次の百年へ～

一橋新聞部

今年、経済学部の佐藤主光学部長が紫綬褒章を受章した。紫綬褒章とは、学術分野において優れた業績を挙げた人などに授与されるものであり、受章は大変な栄誉とされている。本紙は、佐藤学部長に学生時代や研究者人生について伺った。

——紫綬褒章受賞おめでとうございます。感想をお聞かせください。

なぜ受賞できたか、これといった理由は分かりません(笑)。

ただ、一つ思い当たることがあるのは、これまで私が「いかに学術的知見を政策の現場に繋げるか」に腐心してきたということ。学術的な面と現実の政策の現場の両方をみてきたことが評価されたのかもしれない。

——先生は秋田のご出身ですね。本学に進学されるにあたって上京された当時、どのようなお気持ちでしたか。

私には双子の弟がいます。彼は同じ年に東京大学に進学しました。弟と二人で上京して同じ部屋に下宿しました。偶然ですが、下宿先の大家さんが秋田のご出身だったこともあり、あまり心細さは感じませんでした。むしろ、東京という都会の物珍しさに期待する気持ちが大きかったです。

——本学で印象に残っている授業、先生はいませんか。

石弘光先生(後に一橋大学学長、政府税制調査会会長を歴任)ですね。彼は私が研究

者になるきっかけを作ってくれた先生です。石先生の財政学の授業は面白かったです。

今の私の授業は石先生の口調もまねているところもあるのです(笑)。石先生は講義で計算を間違えたりすることがありました。でも、石先生が言うとなんだか納得してしま

うのですよ。それで後で見返したら「やっぱり違った」なんてこともありましたね(笑)。先生は時間に厳しい人

でした。その影響で、私も今でも時間をしっかり守るようになっています。全体的な印象として、当時の先生方は各々の好きなことを好きなように話してくださいましたね。系統立った授業ではなかったかもしれませんが、その分刺激的なものがありました。今は積み上げるように系統立てて教えるてはいけないという風潮が強くなっていますね。それが本来のあり方かもしれない(笑)。

——先生は元々研究者になろうと決めていらしたのでしょうか。また、研究者になるきっかけは何でしたか。

もともと何になりたかったかは覚えていませんね(笑)。ただ、2生の時に石先生の前期ゼミ(現在の基礎ゼミ)にはいったことの影響は大きかったです。当時財政学の第一人者だった石先生の授業を受けて経済学・財政学に興味を持つたこと、そして石先生から「大学院に来ないか」と誘われたことが研究者になるきっかけでした。ただ当時はバブル経済だったので将来への見通しが今より楽観的で「大

「今を懸命に、真摯に生きること」

佐藤主光経済学部長が紫綬褒章を受章



紫綬褒章を受章した佐藤主光経済学部長

になるということは不可能ですが、「こうなれば良いんだ」というロールモデルを持っておくことは、未来への不安を和らげてくれますね。

——研究者になってよかったこと、予想に反したことはありますか。

私は割と個人主義タイプの人間なので、このような仕事は向いているかもしれないですね。自分の部屋が与えられて、自分の好きなように時間を使えるわけです。ただ、それは「自分で時間をコントロールしなくてはいけない」ということでもあります。私は石先生の訓練を受けているのでうまくやっています(笑)。

若し人と関わる機会が多いのも魅力かもしれません。気持ちがいままでもいられますよね。研究面で当初の想定に反したこともありました。もともと私は学術一筋の研究者になるつもりでしたが、石先生をはじめ当時の上司に連れられて政策の現場を多く経験してきたことから、政策的な研究もするようになりました。

——研究者として歩んでこられて、何か転換点はありませんか。

小泉内閣の構造改革で地方分権化が進んだことは転機でした。一般的に「理論屋」と言われる経済学者は現場の制度に疎く、欧米的な議論を展開してしまいがちですね、かといって制度に詳しくない人は経済理論が説明できなかつたりします。そんな中、私は地方への補助金という具体的な制度と、ソフトバジェットと

——研究職に進む学生は少数ですが、完全にその人のよう

いう一見抽象的な理論を繋いだのです。これが『地方交付税の経済学』という本になり、日経・経済図書文化賞を受賞しました。「理論は理論、現実には現実なのか」と思ってしまうこともありましたが、それまで私が研究していた理論が現実の場で使えるということがわかり、自信が付きました。この時期は転換点と言えると思います。

——最後に、学生に一言お願いします。

将来を見通すことは大切ですが、ただ足元をおろそかにしてはいけません。よく学生に言っているのは「チャンスはチャンスの顔をして訪れない」ということです。難しい授業、厳しい状況、これらが自分にとっては何かを得るきっかけになります。



自由のある研究者生活が好きだと語る

【野村亮太】

本紙は今年、1924年の創刊から100年を迎える。大正から昭和、平成を経て令和に至るまでの4つの時代を通じ、本紙には学生の視点に基づいた様々な記事が掲載されてきた。この企画はそれらの記事を通して、読者とともに本学のこれまでの歩みを振り返ろうとするものである。

今回は、1930年代初頭の本紙に寄稿された、世界恐慌に対する批評文を扱った。今回は、いよいよ戦争に突入していく時代、そして戦時中という状況下での本紙の動向を見ていきたい。本紙と本紙が、どのように戦争と向き合っていたのかを振り返っていき。



【強まる検閲と方針転換】
1939年、反戦を唱える学生たち数十名が警察当局により検挙される。この中には新聞部員も含まれており、当時の新聞部は激化する言論弾圧に対し大きな危機感を抱くことになる。結果として、新聞部は言論を維持するために、時代に迎合することをやむなくされた。本紙300号（1940年1月1日発行）の1面にて「迎皇紀2600年（※）」と淡々と表記してあることから、この迎合をせざるをえなかった当時の状況が伺える。

【太平洋戦争と一橋】
日本海軍による真珠湾への奇襲攻撃を機に、1941年12月8日、太平洋戦争の火蓋が切つて落とされた。全面戦争の突入により、国民生活にも大きな影響が出るようになる。当時の本紙でも、本学への影響の記憶が書き綴られている。本紙346号（1942年4月25日発行）には、同年4月に発生した本土初空襲時における本学の様子を取り上げられている。以下、記事の一部抜粋である。

「空襲警報が武蔵野の広野に震撼させて鳴りわたつたのは、授業も終わり書食もすましてぼちぼち学生の帰路にくころであつた。警報発令と共に教務掛の岩田さんは今迄とつていた事務を打ち棄て早速ゲートル。戦帽帽のいでたちもかひがひしくメガホン片手に学園のすみからすみ迄自転車を走らせて「退避せよ退避せよ」と連呼する。教門を出かけていた学生も早速付

本紙 100 周年記念企画 バックナンバー第 4 弾

日中・太平洋戦争と一橋新聞

近の建物の下に入る。(中略) 暫らくすると遠山配属将官に引率された専門部中和寮生二十数名が隊伍整然と正面玄関に到着、直ちに御真影の警護に配備される。(中略) 警報発令と同時に図書館屋上には空襲警報の赤旗が風にひるがへり門衛さんが二人と学生一人が双眼鏡とメガホンを手にしてきつと空を仰ぎ敵機の来襲を待ちかまえる。(以下略)

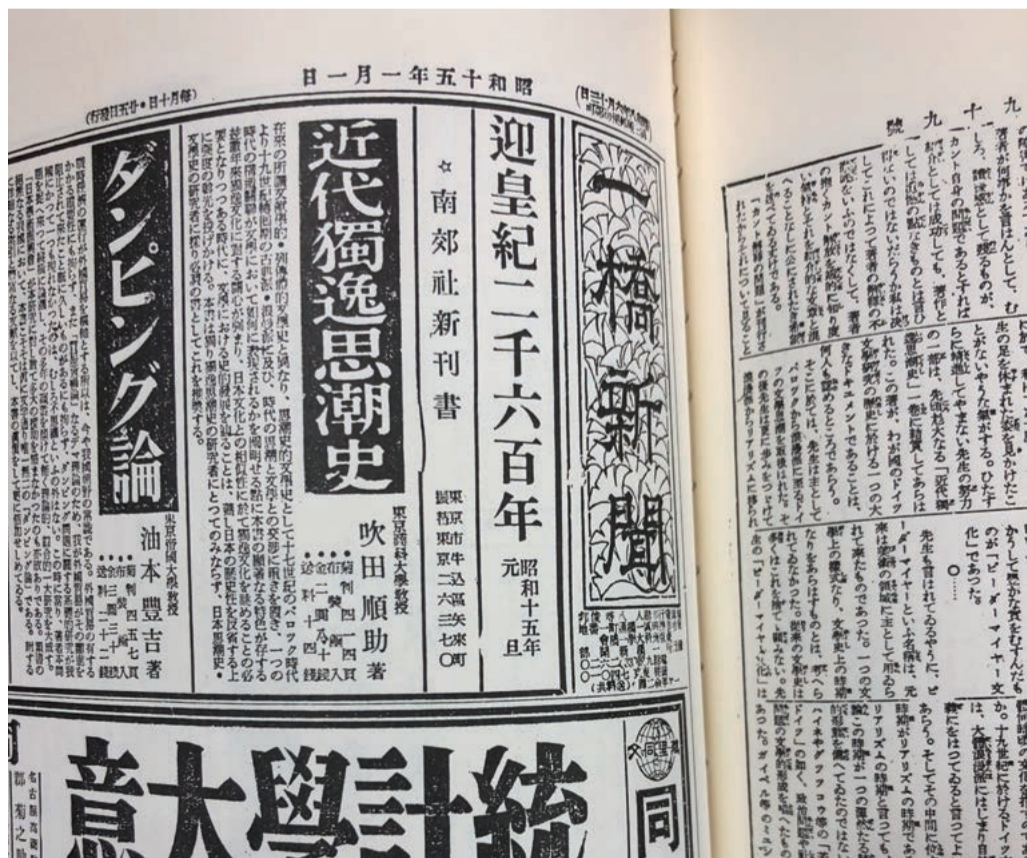
空襲では付近に「敵機」が来ることもなく、被害は出なかつたようだが、記事からは、職員・学生二丸となつて、組織的に空襲に備える制度が出来上がつていた様子が伺える。

戦争の影響は、授業内容にも及んでいた。紙面での授業紹介の欄では、「東亜経済論」「戦時経済論」「日本産業論」といった授業名が並び、戦争に即応したものに置き換わつていくことが読み取れる。



戦禍は徐々に拡大

強まる言論弾圧 次第に政府に迎合



1940年発行の本紙300号。「迎皇紀二千六百年」の文字が大きく掲げられている

【戦局の悪化と活動停止】
戦局が次第に悪化していく中で、兵力の不足を補うことを目的に、学徒出陣がなされることが決定する。1943年のことだ。対象は高等教育機関に在籍する20歳以上の文科系学生であつたことから、文系単科大の本学の学生は、その多くが戦地へ赴くこととなつた。当時の本紙は、勤労奉仕や戦意高揚のための言論指導の役割を担わされており、学徒出陣を報じる記事に、当時の報道姿勢がよく現れている。本紙372号（1943年9月25日発行）では、「一橋の誇りを胸に抱き 決戦場へ我等征かん」と言葉が、一面に踊つている。

新聞部に関しても、部員の多くが学徒出陣に動員されてしまい、同年10月には休刊となつている。

出陣学徒と母校の連絡をつなぐための必要性から、わずかに残された学生の手によって翌年1月には復刊するものの、4月に学生新聞を一つにまとめるとの通達が政府情報局からもたらされる。全国の学生新聞を統合したプロパガンダ紙「学生新聞」は、発行を東大新聞社に一元化し、他の大学は編集員などを派遣するというものであつた。本紙と東京工業大の新聞部は、この決定に猛烈に反対するものの、結局は押し切られてしまふ。本紙はこの決定後もなん

とか新聞の発行を試みるも、警視庁からの発禁命令が出され、ここに、一橋新聞の発行は完全に停止することになる。一橋新聞が活動を再開するのは、終戦翌年の1946年のことであつた。

(※) 皇紀とは明治政府が独自に設定した年号で、神武天皇即位の年を元年と置いた。1940年は神武天皇即位後2600年の年であつた。

【田村英慈】

アクシデント乗り越え、 夢の表彰台へ

5月27日から4日間にわたり、ボスニアヘルツェゴビナの都市バニャルカで開催されたラフティング世界大会の男子ジュニア部門にて、一橋大学・津田塾大学ラフティング部ストローム会の男子チームTAMAが総合3位の成績を残した。

レースラフティングとは、ゴムボートで激流を乗り越えるタイムを競う競技で、4人1チームで実施される。大会では、200〜300mの短い距離を1分程で下るスプリント、2チーム同時にスタートして速さを競うH2H、設置されたゲートを通るタイム



世界総合3位に輝いた、チーム「TAMA」のメンバー

を競うスラローム、13〜14kmの長距離を50分ほどで下るダウンリバーの4種目を4日間の各日に実施し、合計点で順位が決まる。TAMAは3月に実施された国内選考を勝ち抜き、同大会男子ジュニア部門の出場権を得ていた。

ウルバス川を会場とした選手権会場には、世界各地のおよそ20の国と地域から選手が集い、多様な人々・言語が行き交う祭りのような様相を呈していた。期間中は日本人選手全体が同じ宿泊施設で過ごし、そこでの交流も盛んだったという。

「世界大会で表彰台に上がること」だったとチームの赤羽寛さん(社4)は話す。

大会初日、短距離種目スプリントで第3位と、TAMAは幸先のよいスタートを切る。しかし2日目のH2Hで、川中であつた人工物にゴムボートが接触し、競技中にボートが破裂してしまう稀に見るアクシデントに見舞われる。観客の応援もあり、なんとかコース自体は下りきることができたものの、アクシデントで大幅に順位が下がってしまったことに対し、大きく動揺してしまつたという。

「終わつたことを引きずつ

ラフティング部 世界3位

富士見通りのマンション解体へ



解体が決まったマンションの外観

東京都国立市にて、引き渡し翌月に迫るマンションの解体が決まった。完成間近のマンションの解体の決定は、異例のことだ。

解体が決まったのは、国立市中二丁目位置する「グラドメゾン国立富士見通り」。事業者である大手住宅メーカーの積水ハウスは6月4日、事業の中止とマンションの解体を市に届け出た。翌7月には受け渡しが始まる予定であ

つたマンションだけに、この時期の取り壊し決定は、大きな衝撃を持って受け止められた。

解体の理由として同社は、「景観上の問題」と発表している。マンションが建つ国立富士見通りは、富士山の絶景が望めることで有名な地。関東・富士見百景にも選ばれている。この富士山の眺望の一部が、当該マンションによって隠れてしまったことが、今

回の問題点とされている。積水ハウスは、マンションによって景観を損ねてしまうことへの悪影響を考慮し、取り壊しに至つたと説明する。

国立での異例の事態は、全国各地のニュースで取り上げられ、「マンションの解体は適切かどうか」を巡り、ネット上でも賛否両論が巻き起こつた。

【田村英慈】

てもしよがない」との気持ちで臨んだ3日目のスラローム。川中のゲートを通り過ぎる同競技は、大きな波を横切つたり、波が渦巻く中で船をコントロールしたりする必要がある、高い技術力が求められる。同じ場所で開催された過去の競技動画を直前まで見直すなど入念な準備を重ねた結果、全体2位という高順位を残し、最終日へ弾みをつけた。

最終日の長距離種目ダウンでは、レース序盤から上位陣に食い込み、漕ぎ続けること一時間弱。何とか上位陣を維持したまま、ゴールラインを

切つた。総合3位、チームの目標を成し遂げることができた。

世界3位という成績を残した今大会を振り返って、上田貴義さん(商3)と幅巧さん(商3)は「結果を残せてよかった。現地や日本チームの人に感謝したい」、「世界大会を通して、国を背負う感覚を知つた」とそれぞれ語つた。また、世界との戦いの中で、パドルを扱う技術(パドリング)の流派や個性を目の当たりにするなど、新しい発見もあった。

ラフティング部の今後の展

望について、白濱篤志さん(経3)は「アルゼンチンで世界大会が開催される予定なので、部から出場チームを出せるようにしっかり練習したい。」と語つた。

【白坂結稀】

【おわびと訂正】
6月4日付1244号2面「如水会」の知られざる実態に迫る」の記事中、「1928年(の新装改築)」とあるのは、「1982年」の誤りでした。おわびして訂正いたします。

如水会 入会のご案内

入学時より既に多くの皆様に如水会にご入会いただいております。誠にありがとうございます。在学中のお手続きが大変お得になっておりますので、まだご入会されていない方に改めてご案内申し上げます。

<入会手続き> ◎学生時の入会が大変お得です。

会費

- ① 32歳まで一括払い 28,000円
- ② 終身会費 150,000円

※「32歳まで一括払い」は在学中のみ受け付けます。
※会費の他に入会金1,000円がかかります。

WEBサイト <https://www.josuikai.net>
または右のQRコードよりお手続きください。



< 会員証 >

一橋のシンボル兼松講堂がデザインされたオリジナルカードです。入会手続きとあわせてお申し込みください。また、クレジット機能がついており留学や海外旅行にお出掛けの際にもお使いいただけます。

- *カード年会費は無料です(会員特典として如水会が負担)
- *安心してご利用いただけるよう限度額を10万円に設定しています
- *ご利用することで母校支援ができます(ご利用額に応じカード会社より還元され如水会を通じて母校へ支援されます)



入会について、ご不明な点がございましたら会員グループまでお問合せください。

<如水会 会員グループ>

mi@josuikai-office.or.jp / TEL:03-3262-0114